

「最後まで食べさせたい」気持ちの 東西比較

全老健 常務理事、介護老人保健施設竜間之郷 施設長

大河内 二郎

2018年9月に、台湾高雄の退役軍人病院（高雄榮民総医院）の周明岳先生から、高齢者医療の国際シンポジウムに招待された。ちょうど孔子の誕生日にあたり孔子廟で行われていた古風な祭礼を見学した。

近くの儒教寺院では二十四孝のミニチュアモデルが並んでいた。二十四孝は親孝行の見本集である。日本でも、江戸時代にはこれらを寺小屋等で学んだはずである。この24の親孝行話のうち、7つが年老いていく親に食べさせる内容である。

台湾では、日本と同様に親に最後まで食べさせたいというメンタリティーが根強い一方で、胃ろうをつくることを嫌っていた。腹部に穴を開けると体のエネルギーが抜けていくということらしいが、それが道教などの宗教に基づくものなのか、中国医学に基づくものなのかは聞きそびれた。

胃ろうをしないため、老人ホームにいる食べられなくなった高齢者は経鼻栄養が選択される可能性が高くなる。しかし、経鼻チューブは簡単に抜くことができるので、今度は手足を拘束され、かえって寝たきりになり、さらには褥瘡が悪化するという悪循環となってしまう。これは日本が通ってきた道のように思えた。

シンポジウムには、フィンランドからの研究者 Jouko Laurila 先生も来ており、日本や台湾の親に最後まで食べさせたいという気持ちはわかるが、胃ろうや経鼻栄養をしてまで食べさせるのは「虐待」であるとフィンランドでは考えられていると述べた。実際多くのヨーロッパ諸国では、食事介助は行われていない。それが必要となった段階で看取りとなる。スイス、オランダ、ベルギー、ルクセンブルクのほか、アメリカのいくつかの州では積極的安楽死も選択肢となる。

もう一人の招待者である韓国の Hyuk Ga 先生は、昨年韓国で施行された尊厳死法について、ガ

ン等のいくつかの疾患では延命中止ができるが、自己決定できない認知症が除外されていると述べた。また、高齢者が食べられなくなった時の選択肢としての尊厳死法ではなく、韓国でも親に最後まで食べさせたいという願望は強いとのことであった。タイ人の研究者も、親に最後まで食べさせたいという希望が強いとのこと。

このように東アジアとヨーロッパを比較すると、東アジアでは、高齢者に最後まで食べさせたいという思いが強い。「餓死」させたくないという気持ちの裏返しのようにも思われた。一方、ヨーロッパ諸国では、最後まで食べさせることにこだわりがなく、むしろ本人の意志に反して食べさせて延命させることを嫌う傾向がある。同じ人類なのにこういった差が生まれたのは、どこに原因があるのだろうか。日本、台湾、タイ、韓国いずれも稲作文化の国である。この作業に家族や集落で携わる習慣から来たものなのだろうか。文化人類学的にも興味がある。いずれインドや中近東に行くことがあれば、アジアとヨーロッパとの境界部での考えや習慣についても調べてみたい。

ところで、昨年より内閣府が主催する「アジアに紹介すべき『日本的介護』の整理（事例の整理等）ワーキンググループ」という会議に出席している。このワーキンググループでは、「高齢者に対する適切な介護によって、対象の方の状態が維持・改善される」という考えに基づいて議論が進んでいる。高齢者の状態を改善させるのは老健施設のひとつの機能ではあるが、ADL等の諸機能は年単位で見ると低下する。

アジアに紹介すべき老健の考え方としては、「入所中に少しでも機能を改善し、ご自宅に帰って、美味しいものを食べてください。また心身機能が低下したら、いつでも老健を再利用してください」というところだろうか。